

2020年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

連合本部 総合組織局 山根木 晴 久

CSA40周年の節目の年に人生初ラオス、しかも素晴らしいメンバーと共に忘れがたい経験ができた。これまでこの運動を支え続けて来られた諸先輩のみなさん、今現在この運動を支えて頂いているみなさん、そしてこの1週間ともに活動を担って頂いた参加者の皆さんに感謝申し上げたい。

ワーキング・スタディ・ツアーに関しては、これまで参加した方々からその有意義さを伺っており、期待を込めて参加したが、期待以上の充実した日々であった。具体的には、①CSAが支援している現場を直視し、その意義を再確認することができたこと、②現在抱えている課題への対応ができたこと、③ラオスという国への理解が深まったこと、である。

まずは、現場の直視と意義の再認識。今回はふたつの小学校（ナラオ村、クサンバット村）とサンティパープ高校寮を訪問した。CSAが寄贈した校舎は日本ではもう見ないような質素なものであったが、大切に使われている様子が見て取れた。子どもたちや先生方に加え村長や地域の方々の熱烈な歓迎からも感謝の気持ちが伝わってきた。

驚いたのは高校生寮を訪問した時のこと。寮生との集いで絵のコンテストで表彰されたと紹介された生徒の部屋（4人部屋）を訪ねると、二段ベッドの彼のスペースいっぱい絵が張り付けられていた。「差し上げます」と差し出された2枚の絵ハガキを手にとった際、これは…と息のみ彼の顔を見る。「はい、商品として街で売られています」とはにかんだ笑顔を見せてくれた。昨夜ナイトマーケットで売られていた数々の絵はがきと同様のものが手に中に入った。ここの寮生はラオスの中でも優秀と聞いていたが、みんな見るからに真面目で優秀な雰囲気を出している生徒たち。

夜の卒業生との交流でも、多くが国立ラオス大学に進学し、行政機関や金融機関、病院、日系企業で活躍している姿に接することができた。もしCSAがサンティパープ高校に寮を作らなかったらどうだったろうか。彼ら彼女らの今の活躍する姿はあったのだろうか…。そう考えるとCSAの活動は貧困の子どもたちを応援しているだけでなく、将来のラオス社会の担い手を支援しているのである。そのことが実感できた瞬間であった。

ラオスは今だ教育施設は十分でなく、教員も不足している。義務教育なのに貧困や家業を手伝いが理由で、学校に通うことができない子どもたちも少なくない。もちろんそのすべてを支援できるものではないが、一部であっても支援すること、支援している校舎や寮の老築化への対応など支援活動の継続性を十分に念頭において活動していくことが重要だということを現地で改めて再認識した。

現在抱えている課題について、これはCSA副会長の立場である私が今回のスタディ・ツアーに参加した一番の理由である。古着を送る活動に関して、日本国内から集められた古着は、横浜港からはバンコク港経由でラオスに搬送しているのだが、ラオス側の引き取りが遅れ、バンコク港で長期滞留し保管料がかさんでいるという問題が生じている。この活動はラオス保健省からの要請に基づくものであることから、ナオブッタ保健省事務次官に対し事態の改





善を要請し、その対応の約束を取り付けた。正直言いにくい話であったが、中古衣類を必要としているラオスの人々のためにも、毎年毎年この運動に参加し古着を提供してくれている日本の仲間のためにも、意を決して申し上げた次第である。事態の推移を見守りたい。

ラオスへの理解について、東南アジアには縁がありフィリピン、ベトナム、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアといった国々は過去数度訪問する機会を得たが、ラオスは人

生初であった。ビエンチャンの空港を降りて感じたのは静かで整然としていること。東南アジアで空港を出てまず出迎えてくれるのは騒然で混沌とした熱気だと思い込んでいた私にとっては驚きであった。もちろん、街に出れば行きかうバイクに乗った若者たちなど、いかにも東南アジアらしい若々しい活気は十分感じられたが、何かせかせかしない、おっとりした気分が広がっている。某省の次官を表敬した際、その腕に金のロレックスが巻かれていたが、よく見ると秒針はクォーツであり良くあるアジアのイミテーションであった。しかし、それがどうしたという感じで身につけられている。食事も素朴なものが多い。言われて尽くされていることだが、価値観の違い、幸せとは何かということを考えさせられるというが、まさにそうであった。日本でラオスのような生活を求めようもないが、大切なものを思い出させてもらった気がした。

最後に、参加メンバーとは連夜、ある時はメコン川沿いで、またある時は村の料理店で、貴重な意見交換をさせてもらったことも、ツアーの思い出のひとつとして心に刻まれた。

この体験を生かし、これからもより一層CSAの活動を充実したものにしていきたい。

2020年ワーキング・スタディー・ツアーに参加して

UAゼンセン 教育社会運動局 小林 孝徳



今回のツアーに参加させて頂けたことは私にとって非常に良い経験となりました。それは、UAゼンセンで「中古衣類カンパ活動」を行っている担当として、実際の現地に行くことで、学校訪問と政府の倉庫の視察や意見交換を通じ成果を実感できたことです。

また、タイ・ラオスの行政機関と意見交換する中で、中古衣類の輸送や学校建設・補修についての課題が見ええたことも大きな意味がありました。これまで、CSA活動について一定の理解はあったものの、集めた衣類やカンパ金がどのように使われているのか、現地の方々はいったいどう思っているのか、よく理解してなかったように思います。

ラオスは、日本の本州程の面積に約700万人の人口で構成されており、日本から直接国際便でいけるルートはなく、いったんバンコク等を経由しなければいけない国です。

ラオスにCSAが設立した小学校は24校あり、今回は1995年にCSAが最初に建てたクッサンバット村小学校と11番目に建てたナラオ村小学校の訪問でした。両小学校とも、私たちが到着すると中古衣類を校庭に並べ、生徒が並び衣類の寄贈式が行なわれ、小学校の現状について校長より報告と支援に関する感謝の意が示めされました。その後、学校を視察し、子ども達と交流をしました。訪問までは、言葉が通じなくて大丈夫だろうかと心配でしたが、綱引きの綱と紙飛行機を身振り手振りで教えると、子ども達は真剣に聞いてくれ、いつの間にか一緒に笑顔で交流できました。また、クッサンバット小学校は、建設から年数がたっているため「壁の塗り替え」等の要請があり、確認を行いました。CSAの活動は学校を建設するだけにとどまらず、学校の状況を確認し、補修をすることによって学校が維持できるようにフォローしていることで、学校が現在迄維持されていることがわかりました。仮に建設するだけで、視察やフォローをせずにいたら、小学校自体がなくなる危険性があるのです。将来のラオスを担う子ども達を育てるためのこの事業には、建てることと継続させることの両方の支援がないと成り立たないことを実感しました。

また、ラオスではルアンプラバンにあるサンティパープ高校の学生寮に対して全面的な支援を行っており、卒業生や寮生と交流することもできました。支援している高校生は遠方の過疎地に住んでおりCSAの支援がなければ高校に通えない学生です。交流のなかで学生達はCSAに感謝をしており、学生たちは必死に勉強しそれぞれ夢をもっていることもわかりました。卒業生の中には、農林省で働いていたり、医師を目指して大学の医学部へ進学したりしており、ラオスの将来が楽しみに思える方ばかりでした。

中古衣類に関しては、ラオス保健省・タイ社会開発福祉省が、それぞれCSAから送った中古衣類を倉庫で管理し、各県からの要請で、地域へ送り生活困窮者に配布していました。ラオスの北部地域では気温が急激に下がるので、冬物も必要であることがわかりました。タイでは中古衣類を組織的に集め継続的に送っているのはCSAだけであり、障がい者や自然災害の被災者へも届けられていることも初めて知ることができました。

両国の日本大使館にも訪問し、CSAの活動報告をし、両国の政治や経済情勢について教えて頂く機会を得ました。

今回の経験で得たCSA活動の重要性や社会貢献性を伝えていくことがツアーに参加させて頂いた者の役割だと思います。伝えることで共感と活動が拡がり、ラオスやタイの貧困者が減っていくことを願っています。

最後に、山根木団長、鈴木事務局長をはじめ、すばらしいメンバーに会えて組織を超えた交流ができたことに心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

2020ワーキング・スタディー・ツアーに参加して

UAゼンセン イオンリテールワーカーズユニオン 吉岡 爽

まず初めに今回このような貴重な経験をさせて頂き、CSAの事務局の皆さまはじめ関係者の皆さま、そしてこの機会を下さったUAゼンセンの皆さま、組合員のみなさまに心より感謝申し上げます。

単組では「救援衣料を送る運動」を取り組んでおり、輸送費及び衣料支援を行っていることは知っていましたが、ツアーに参加するまでCSAの活動をあまり理解していませんでした。

私の印象では、タイは発展しているので、救援衣料など必要なのかという疑問を持ちながらこ

の活動に参加しました。しかし、ツアーに参加し、現地でCSAが取り組んでいる活動を間近で見ることができ、タイ・ラオスでとても重要で必要な活動が行われていると知ることができました。

ツアーの中で印象深かったことは、学生との交流です。ナラオ村小学校は生徒数が多く小学校から高校まで一つの敷地に併設されていました。言葉も通じないですが、日本から来たメンバーを歓迎してくれ、身振り手振りや笑顔で交流をすることができました。クサンバット村小学校の生徒数は少なく一緒に紙飛行機で遊びました。CSAが支援してできた小学校で子どもたちが楽しく遊び、一生懸命勉強をしている姿をみて、これからのラオスを担う子どもたちが一人でも多く小学校に行けるようにしなければいけないと感じました。まだ小学校が足りず学校に行けない子どもや、家の農業の人手が足りず学校に行っても途中で辞めてしまうという現状があるようなので、まずは小学校を作り続けラオスの教育制度が整ってほしいと思いました。



二点目は各地での救援衣類倉庫での意見交換です。渡航当初は救援衣料が必要かと疑問に思っていました。各地の倉庫を訪問し、多くの組織が送った段ボールを見て感動しました。また、タイ倉庫での質疑にて、定期的な衣料を送っている組織はCSAのみであるということでした。CSAがこの活動をやめると倉庫で仕分けをしてくれている人の雇用や災害や貧困で衣類を求めている人たちが困ってしまうとわかり、私たちはとても重要な活動をしているのだと知ることができました。今回各地域のニーズを聞くことができたので来年はニーズに合った衣料を送れたらと思います。

最後に鈴木事務局長をはじめ山根木団長、ツアーを共に過ごした皆さまには感謝しております。様々な組織から参加した皆さんと交流をし、一緒に活動ができ、刺激を受けることができました。

今回のツアーで学んだことを一人でも多くの組合員や仲間に伝えていきたいと思っています。

2020年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン 全プリマハム労働組合 藤井雅実

まず初めに、CSA事務局と関係者の皆様、今回このような機会を与えて下さったUAゼンセン並びに組合員の皆様に感謝申し上げます。今回このツアーに参加し、CSAの活動内容やその活動に対する現地の方々の感謝の気持ちを感じることができ、非常に良い経験となりました。

小学校や衣類倉庫では、弊組合（某G工場）から送付した段ボールを見つけることができ、とても感動しました。また、衣類倉庫を訪問した際、送付した衣類は災害時などに重宝しており、不足しているのは男性用・速乾性のある夏物衣類などという話を伺いました。弊組合では、毎年衣類支援活動に協力しておりますが、中にはまだ参加していない組合員も多く見られます。困っている人がいること、送った衣類が現地で活用されていることを共有し、今後は支援活動に協力的になってもらいたいと思います。

ラオスの小学校2か所を訪れた際には、子どもたちがとても純粋である印象を受けました。綱引きや紙飛行機作りでは、言葉は通じなくても一緒に楽しむことができました。彼ら・彼女らが少しでも快適な環境で勉強し、将来ラオスをより良い国にしていってもらえるよう、小学校寄贈などの支援を通して力になっていきたいと感じました。

また、ラオスという国について、このツアーに参加するまで全く知りませんでした。日本人の目線で見ると、ラオスは経済・インフラなどの面から途上国である印象でしたが、現地の人（特に小学生の子どもたち）の表情が生き生きとしていたこと、サンティパーブ高校を卒業した優秀な学生たちの多くが海外ではなくラオスで働くことを希望していることから、彼らが母国を愛しているように感じました。近隣国と比較するとまだ認知度は低いですが、今後は日本（熊本）⇄ラオスの直行便就航も計画されているそうなので、日本でもラオスへ訪れる人が増え、良さが広まっていくと良いと思います。

このような貴重な経験ができる機会はなかなか巡ってくるものではないと思いますが、今後また機会を頂ける場合には、是非若い世代の皆様積極的に参加してもらいたいです。その際には、衣類倉庫から配布された先の最終的な衣類利用者にも会えるようにして頂けると、より活動の効果を実感してもらえそうです。

今回のツアーを無事終えることができ、鈴木事務局長、山根木団長をはじめ、参加メンバーの皆様にはとても感謝しています。本当にありがとうございました。このツアーでできた繋がりを今後も大切にしていきたいと思っています。



2020年ワーキング・スタディー・ツアーに参加して

JAM 神鋼機器工業労働組合 谷口 憂也

1月25日から2月1日、アジア連帯委員会(以下CSA)主催の2020年ワーキング・スタディー・ツアー(以下WST)に参加した。基幹労連、UAゼンセン、連合本部、CSA事務局、そして私の計8名の視察団がタイ・ラオスへ渡航。CSAの活動を視察し、活動の理解や意義を深め現地の人々との交流が目的。

神鋼機器工業労組の青年部で救援衣類を集め、そして昨年9月にJAM山陰青年協議会サマーキャンプで仕分・梱包・発送作業をしており、その送った衣類を視察する位のイメージだった。緊張しながら羽田へ合流したが、団結式を終える頃には「自分には何ができるのだろう。何か持って帰りたい」と強い思いが湧いていた。

渡航し、小学校2校を訪問。ここでは、ハートエイド21募金からも拠出されCSAが建設寄贈した校舎の補修箇所等の確認や学校側の





クッサンバット村小学生に手作りの兜をプレゼント

要望を聞いた。出会った子供達は素足や靴の子、洋服の差から一見して貧富の差が伺えたが、全員の子供たちが素直で純粋な目の輝きと、殺伐とした教室で熱心に勉強に取り組む姿、外では綱引きに大喜びし遊ぶ姿は心を打たれた。自分の今の環境や生活を振り返ると、これまで当たり前だと思っていたことが標準ではないんだ。贅沢はいえないし物を大事にするべきだと胸が痛んだ。

その後、救援衣類の窓口タイ・ラオス当局との意見交換会や衣類倉庫視察をした。倉庫いっ

ぱいの救援衣類の中に、JAMのステッカー一段ボールも確認でき感無量だった。しかし、中古衣類はまだ不足しており、特に大規模災害が発生すると一瞬で配給され倉庫は空になる。慢性的に男性の衣類が不足（8割が女性衣類）しており、特に半そでや、レインコートが必要である。

次に、CSAが寄贈した高校寮を訪問。生徒らと交流をした。学費や食費を含む生活費、帰郷旅費等の支援もしている。なぜならラオスでは優秀な生徒でも近隣に高校がない。家庭が貧しく高校に進学できない状況だ。生徒の中には授業が終わると家の生活を支えるために働く子もいた。どの生徒も将来の目標に向かって勉学に取り組む姿勢が滲み出ており、日本の高校生より随分精神的に大人にみえた。

最終日のタイ社会開発福祉省での救援衣類引き渡し式では、この活動をしている日本の皆を代表して感謝の気持ちを伝えられた。そして、今後も子供達や国内の地方を中心とした貧しい方々に衣類を届ける事。継続しCSAの活動を進めていく事をお互いに誓い合った。救援衣類は、タイへ4,582箱(7コンテナ)。ラオスへ3,632箱(6コンテナ)送られていた。日本全国各地の多くの仲間からの救援衣類は、現地で必要とする人々に繋がった。

どの訪問先でも私たちは歓迎され、温かく迎え入れられ、活動への感謝が実感できた。今回全ての活動や人々との出会いは、自分の五感で確かめ、初めて知ることや・感じるこ



ラオス保健省衣類倉庫でJAMステッカーを発見

とばかりだった。現地ではまだ多くの支援が必要であるのが現実。学校に通いたくても学校の不足や、家の事情で学校に行けない子供達に物資・浄財の救援はもちろんだが、政策支援の必要性があると思った。例えば現地教育省への支援、サポートは、もっと現状を改善できないだろうか。救援衣類を運ぶ船便の通関手続きが慢性的に遅延し、そのため莫大な保管費を受入側が負担する実態はとても悔しかった。支援策をとれる環境づくりを現地の関係各所などと話し現状の改善を一緒にできないだろうか。

さて、今回の視察団は参加・協働型を基本スタイルとし、明確な役割分担や毎日の夕食時に全員で、その日の感想を共有した。参加者の殆どは大手単組や専従の方で、小さい単組でしかも現場からきている私は、当初不安で気後れしていたが、WSTが終わった今は、これからもずっと繋がっていきたい仲間となった。

チーム運営と現地活動で必要とされた「積極性」、「コミュニケーション」、「輪」は自身の成長が実感でき有意義だった。「自分に何ができるのだろう。」これからも毎日の生活・業務・活動でこの経験と今の思いを生かし伝えていきたい。

2020年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 IHI労働組合連合会相生支部 薦田 弘 幸

はじめに、ワーキング・スタディ・ツアーに参加させて頂き、数多くの大変貴重な経験をさせて頂きましたことを、組合員の皆さま、基幹労連の皆さま、そしてCSA事務局の皆さまと現地で受入対応頂いた皆さまに心より感謝申し上げます。

これまで、救援衣類を贈る活動を労働組合役員として推進してきましたが、実際にこのツアーへ参加させて頂いたことで、支援活動が現地で如何に必要とされているかを知るとともに、救援衣類だけでなく、小学校の建設・補修や高校生寮の運営支援など幅広い活動が行われており、いずれの活動も現地の方々から感謝されていることを知ることができました。

今回のツアーで、小学校を2校訪問させて頂きました。最初に、ナラオ村小学校(11番目校)訪問では、広い敷地の中に、校舎が数個建っており、校舎を見学しましたが、決して設備的にも恵まれているとはいえない環境の中で、勉学に励んでいる子供たちの様子を見ることができました。この小学校は、生徒数が800名を超えているとのことでしたが、まだまだ、貧困や家庭の事情で、学校に通えない子供たちがたくさんいることを聞き、継続した支援が必要だと改めて実感しました。



次に、クッサンバット村小学校(1番目校)を訪問しました。この小学校はCSAが最初に建設・寄贈した小学校ということもあり、かなり老朽化が進んでいると思っていましたがCSAの支援で、しっかりと補修されており、子供たちが元気に学校に通っていました。両校ともに、訪問すると子供たちが元気に満面の笑顔で私たちを迎えてくれました。子供たちとの交流で、日本から持参した綱で綱引きをしたり、紙飛行機を折って、校庭で飛ばしたり、楽しい時間を過ごさせて頂きました。

また、CSAが建設し運営支援している、サンティパーブ高校生寮を訪問し、熱烈な歓迎を受け、CSAの支援に対する感謝の気持ちを改めて感じるとともに、寮の存在が優秀な学生の育成に寄与していることを知り、支援活動の重要性を再認識することができました。さらに、卒業生との交流では、卒業生の現状を聞くと、医者や教師を目指して進学した方や省庁や建築関係に就職した方など、将来の夢や目標に向かって頑張っている事を知り、ラオス発展の一翼を担う存在になってほしいと思いました。

救援衣類については、ラオス保健省・タイ社会開発福祉省の方と意見交換をし、CSAの支援活動に対する感謝の言葉を頂き、今後も継続した支援の要請を受けました。

保管・配布の方法など管理状況の確認や不足している衣類の種類など意見交換をすることができ、タイでは、男性の夏物衣類とレインコートなどが不足しているとの要望も確認できました。訪問や意見交換などを行うことは、非常に良い活動で、CSAの支援活動が現地の方々に本当に喜ばれている活動だと理解できました。

最後になりますが、鈴木事務局長、山根木団長をはじめ、1週間行動を共にした団のメンバーにも助けていただき、無事に工程を終えることができ、貴重な時間を共にすごさせていただいたことに感謝申し上げます。今回のツアーで体験し学んだことを組合員に伝え、活動の幅が広がるよう尽力していきたいと思っております。ありがとうございました。

2020年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 三菱重工グループ労連 高橋 聡

まずは、今回のワーキング・スタディ・ツアー（WST）に参加させていただき、大変貴重な経験をさせていただきましたこと、関係者の皆さんをはじめ、受け入れていただいたタイ・ラオスの方々に感謝申し上げます。

救援衣類の取り組みについては、組合の活動として知ってはいましたが、実際にどのような形で届くのか分かっておらず、送れば届くだろうと簡単に思っていました。しかし、今回のWSTに参加し、どのような経緯でどのような方が関わって、どんな形で、どんな方々へ届くのか見て感じて、知ることができました。また、訪問先で話を聞くことで、この活動の意味や必要としている状況も知ることができました。



また、CSAの活動としては、教育施設の寄贈を行っており、校舎や寮を建てて子どもたちが学べる環境を整えていることを、これまで、そこまで意識をしていませんでした。CSAがこれまで、23の小学校と1つの中学校、そしてサンティパープ高校生寮を建設寄贈していることは今回のWSTで知りました。多くの学校や学校施設で、多くの子どもたちが学んでいる

のだと分かり、取り組みの重さを感じました。これら多くの教育施設で勉強し、優秀な人材へと育っていき、その人達が更にラオスを良くしていく。そうなっていくことがラオスのためであり、我々もそうなっていくことを願うばかりです。

このツアーで一番印象的であったのが、3日目に訪問した小学校で出会った子供たちの笑顔で、みんなとても素敵な笑顔をしていて、遠い異国から来た知らない大人たちに対して興味津々に目を輝かせていて、我々の話す言葉を、理解しようと聞いているのを見ると、我々の取り組みがこの子供たちの役に立っているのだと、改めて気づかされ、この取り組みを続ける意味を知ることが出来ました。

救援衣類にも学校の運用にも様々な問題があるが、誰のためなのかを考えることが出来れば、解決へ向かって行くのではないかと思います。

最後に、鈴木事務局長をはじめ今回一緒に視察を行った団員の皆さまにつきましては、道中いろいろとお世話になりました。ありがとうございました。非常にいいチームであったと思います。それぞれが、与えられた役割を果たし、更にはフォローし合い、一週間という短い間で強固に団結することが出来たのは、山根木団長の基、「バンザイ三唱」の掛け声があったからこそだと感じています。そして、いつの日かタイ・ラオスで「バンザイ三唱」が根付くことを願っております。



タート・ルアンの前で



パトゥーサイの前で

編 集 後 記

アジア連帯委員会
事務局長 鈴木 隆

2020年ワーキング・スタディ・ツアー(WST)は、参加頂いた7名の皆様の積極的なご協力と関係する方々のご支援により、成功裏に終わることができました。心より感謝申し上げます。

私自身も新たな貴重な体験や発見、そして団員の皆様はもとより、現地でのすばらしい方々との出会いの機会を得ることができ、アジア連帯委員会(CSA)を支援して下さっている連合、連合構成組織と組合員、支援組織と支援者の皆様に改めて厚くお礼申し上げます。

本年のWSTはCSAとして今後の事業に関する明確な目的もあり、訪問により確認できた事等と、本報告書を編集する中で感じた感想を述べ編集後記とします。

1. ラオス・保健省、教育省公式訪問と在ラオス日本国大使館

救援衣類を送る運動は今年で37年目を迎えます。この事業はCSAの前進である「インドシナ難民共済委員会」が1981年に設立された草創期からスタートし、現在もラオスの保健省のトップからCSAに対し支援要請文書が毎年届くことから、その年のこの活動がスタートします。保健省トップとの会談で、この事業の今日的課題として救援衣類は集まるものの、その輸送費コストは高騰し事業を継続する為には新たな方式を早急に具体化する必要があることを痛感しました。また、教育省との意見交換では、ラオスは中学校まで義務教育だが、山間部の子供達は学校が村に無いこと等の理由で、本来受けられる最低限の教育さえ受けられない子供達が現在も多く存在し、義務教育に対する改善が遅々として進んでない現状を再認識しました。ラオスへの小学校建設は、CSAの目的のひとつで「小学校建設によりラオスの識字率の向上に寄与する」為と先輩から聞いたことを思い出しました。在ラオス日本国大使館では政治体制と、行政の現状と問題点の報告も受けました。CSAの支援事業の中核である救援衣類を送る運動の新しい方式の構築と、小学校の建設も2014年の24番目校で留まっている現状打破に向けた対策を講じることの必要性を再確認することができました。



ラオス衣類倉庫で

2. タイ・社会開発福祉省「救援衣類引渡し式」と在タイ日本国大使館

CSAのメンバーが乗ったマイクロバスが、タイ社会開発福祉省の庁舎に到着すると、私たちを出迎えてくれたのは本省の責任者や関係者の方々、そして現地報道陣の姿がありました。

引き渡し式は、CSAのロゴが入った仮設ステージが設置され、支援を受けた人々も集まっていた事は印象的でした。また、式典の後半に当該大臣も駆けつけて団員全員と固い握手をし、メンバーも日本からタイへ送られた救援衣類が、近年発展著しいタイ(バンコク)でも、多くの支援を求めている人々に喜ばれていることを肌で感じる機会になったと思います。

在タイ日本国大使館では、現下の経済発展と労働事情や、タイ人気質等の説明を受けました。CSAは1996年に将来の活動を展望し、アジア諸国との連帯を意識して「アジア連帯委員会」と名称を変え、アジアの開発途上国の人々と連帯し、共生・共栄を目指す運動を進め、現在に至っ

ています。アジアの中で昨年も多くのアセアン関係会議が開催されたタイにおいても、国家の光と影が著しく、救援衣類を継続しつつ新たな支援を模索する時期であると思いました。

最後に、今回の訪問先で共通して感じたことは、国内外を問わず支援を求めている方々への救済は、労働運動の必須の活動として、また、社会貢献の裾野を広げるための「共感の醸成」を着実に実践せねばと思いました。

以上

CSA活動へのご支援・ご協力をお願い

下記のような方法がございます。

1. 会員登録によるご支援

団体会員：年会費一口10,000円から（団体、企業等）

個人会員：年会費一口3,000円から（個人）

2. 救援衣類を送るご支援

毎年、10月初旬にタイ、ラオスの支援を必要としている人や被災者に送るための中古衣類を集めています。

衣類の海外輸送費にあてる輸送募金もお願いしています。

3. 募金によるご支援

(1) 救援衣類を送る運動「輸送募金」：1,000円から

衣類提供者は1箱1,000円が目安です。輸送募金のみのご協力もお願いしています。

(2) ラオスで学校建設・補修をする「学校建設・補修募金」：1,000円から

(3) ラオスの高校生を支援する「高校生寮支援募金」：1,000円から

4. 団体や企業による学校建設・補修等のスポンサー

ラオスで学校建設・補修、教科書や文房具などの支援。

<会費／募金の振込先>

①郵便振替

口座記号番号 00140-7-545101

アジア連帯委員会

②銀行振込口座

中央労働金庫 田町支店 普通1988431

アジア連帯委員会 事務局長 鈴木隆

2020年 CSAワーキング・スタディ・ツアー報告書

発行日 2020年3月

発行者 **アジア連帯委員会 (CSA)**

〒105-0014 東京都港区芝 2-20-12 友愛会館 14 階

Tel (03) 3769-4177 Fax (03) 3769-4178

メール: info@ngo-csa.jp

<http://www.ngo-csa.jp/>

印刷 **株式会社コンポーズ・ユニ**

Tel (03) 3456-1541 Fax (03) 3798-3303

